いずみさの昔と今 第307回

「絵図をよむ④～幕府主導の絵図作成事業、国絵図と分間絵図～」

前回紹介したように、村絵図は一村分の範囲を絵図にしたもので、生産高や村勢（人口、用水、地理などの諸情報）を絵図に書き加えたものなどもあります。この村絵図を絵図作成担当の大名が各村に提出させて、自身のもとで一国の絵図に集約させて幕府へ提出したものが国絵図となります。

絵図の作成は、基本的に作図を絵師、測量などは大名の命令を受けた役人や学者に担当させて行われました。「和泉国分間絵図」の場合では、大坂町奉行が各村に村と村の道のり、川、池などのほか名所旧跡などを記した絵図を作成させ、それらを合体させて各郡の絵図（大鳥郡、泉郡、南郡、日根郡）を作成し、更に4郡分の絵図を一つの絵図にしたものになります。また、絵図名にある「分間」は山野の距離を測り、それを記した図を意味する語であり、絵図作成時に村同士の距離や方向、村の大きさなどを明記したことからこの語を用いたと思われます。続いて作成の経緯と内容をみてみましょう。

元禄2（1696）年2月、和泉国支配は、堺奉行廃止に伴い大坂町奉行のもとへ移行しました。これにより大坂町奉行は新たに支配下となった和泉国の地理、村落、支配関係などの様々な情報を把握する必要が生じました。同年7月、町奉行は、和泉国の情報把握のために和泉国の各所へ達して上述の絵図の作成を命じます。これにより各村は自村の情報を記した絵図を作成することになります。この作成に際しては、農村同士で取り決めがあったようです。これまで紹介してきた絵図には、争い、訴訟の証拠として利用されたものがありましたが、分間絵図作成にあたり提出された絵図については、たとえ村同士で争いになっても、村境の証拠とならないようにあえて村境は不明確にしようと約束を交わして作成されたことがわかっています。つまり、農民にとって国絵図を訴訟に利用することはタブーであり、国絵図とは別に訴訟に利用する絵図を作成していた、ということになります。

縮尺は1/16200で、描写は和泉国の情報を知るという目的で作成が指示されたため、自然地形や海岸部の砂浜との境には沖までの距離や水深などの情報、街道の名称、川の名前などが詳細に記述されています。村・集落は黄色で着色し、丸形・長方形などで町場の長さ、村の領域を表現しつつ、枝村・出在家などの集落は本村の丸形よりも小さい円で描いています。こうして描かれた村や集落の様相は、約300年前の泉佐野市域の集落分布をみるうえで非常に重要な資料となります。大木村には「大木ノ内」と付記された集落が8集落（五所谷出、大和、若崎、奥出など）、日根野には「日根ノ内」と付記された集落が12カ所（峡（そわ）、東上、溝口、西出、心道出など）確認でき、本村と出村（集落）で1つの村が構成されていたことがわかります。そのほか、神社や寺などの信仰施設、古城や塙団右衛門、淡輪重政の石塔など名所旧跡も描かれており、幕府主導の国絵図とは別物の国絵図として仕立てあげられています。

「和泉国分間絵図」は、大坂町奉行による和泉国支配のための情報把握を目的として作成された絵図ですが、その描写には農村同士の争論に際する約束、川の名称や人が住む空間の諸情報などが盛り込まれており、民衆世界を描いた絵図でもありました。日根郡の民衆世界を描いた分間絵図は、7月25日(日)まで開催の歴史館いずみさの春季企画展「絵図をよむ」にて展示中です。

▶「和泉国分間絵図」に描かれた大木地区

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、毎月最終木曜日（いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

日本遺産・中世日根荘を巡る㉔

～旅引付編（8）「上大木の吊り橋」～

JAPAN HERITAGE 日本遺産

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち ―中世日根荘の風景―」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課

◀政基公旅引付

※旅引付の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用（原本は宮内庁書陵部所蔵）

野那歩の吊り橋

上大木蓮華寺の石積みを抜けて「真瀬のひじ岩」を通り、樫井川沿いを上流に歩くと、大阪府内唯一の重要文化的景観に指定された「日根荘大木の農村景観」の構成文化財の一つである上大木の吊り橋が現れます。

木造床板で長さ約30m、幅約2.1m、川底まで約4mの規模となる吊り橋で、末永く地域の貴重な文化財として継承されるよう、令和元年に地元町会によって改修されました。その竣工の際に、元々吊り橋に名称が無かったため、「野那歩（やなぶ）の吊り橋」という名前が公募で決定されました。「やなぶ」というのはこの地区の小字名で、元々は現在、下流に付けられている「恩随橋（おんずいばし）」が架けられていた場所であることから、古くはこの地域のメインストリートであったと考えられます。